さんにち NIE ワークシート　　山梨日日新聞

年　　組　名前：

万博パビリオン「循環」

ルクセンブルク館 内藤ハウスが解体

外構樹木 会社敷地に植樹

韮崎市円野町上円井の内藤ハウス（内藤篤社長）は、大阪・関西万博で建設に携わったルクセンブルクのパビリオンの解体作業を進めている。パビリオンは「循環」をテーマに、解体後に建築部材を再利用する前提でデザインされていて、屋根や外壁など各部材の活用が決まっている。30日には在日ルクセンブルク大使館の関係者らが同社を訪れ、パビリオンの外構に使われていた樹木を同社敷地に移設する植樹式が行われた。〈杉原みずき〉

ルクセンブルクのパビリオンは大きさの異なる13の箱形の建物を組み合わせ、その上を白い膜材で覆うデザインで、各部材の再利用を念頭に設計、施工された。博覧会国際事務局が主催して優れたパビリオンをたたえる「公式参加者アワード」で「サステナビリティ賞」に選ばれた。同社は20日に解体作業に着手した。

ルクセンブルクの政府や商工団体でつくるパビリオンの運営法人が、日本国内の各企業などと契約して部材ごとに再利用を進める。内藤ハウスはリユース先の紹介、選定にも協力した。屋根の膜材はバッグなどに生まれ変わり、外壁に使ったコンクリート型枠用合板（コンパネ）は型枠工事に再利用される予定。柱などは大阪府交野市が公共施設に活用する計画という。

同社敷地にはイロハモミジをはじめ、ツゲやアジサイなど計15本ほどが移設された。植樹式では、ミシェル・レーシュ在日大使が「万博に参加し、日本と政治経済の関係を強化できた。内藤ハウスが建設に協力してくれたおかげ」と感謝。パビリオンのダニエル・ザール館長は「パビリオンは役目を終えたが、木はここで命がつながる。大切に育ててほしい」と述べ、開館中に自身が使っていた枝切りばさみを内藤社長に贈った。

内藤社長は「サーキュラーエコノミー（循環経済）の精神で植樹し、後世に思いをつなぎたい」とあいさつした。

植樹をするミシェル・レーシュ大使＝韮崎市円野町上円井

内藤ハウスが建設したルクセンブルクパビリオン　＝大阪・関西万博会場

（2025 年 10 月 31 日付 山梨日日新聞 18 面）

問1

大阪・関西万博で利用されたルクセンブルクのパビリオンの解体作業が進められています。

「循環」をテーマにした建物の、屋根、外壁、柱などの部材は、どのように再利用されますか。

屋　根：

外　壁：

柱 など：

問2 ルクセンブルクのパビリオンは、どのような賞を受賞しましたか。

問3 内藤社長は、使われていた樹木を同社敷地に移設したことの思いを、どのように話しましたか。

教育目的以外の無断転載 複製および頒布は禁止します
Copyright © 2025 山梨日日新聞社 THE YAMANASHI NICHINICHI SHIMBUN.